


カバに毛がない訳

 Basilio Gimo, David Ker

 Carol Liddiment

 Sayuri Hayashi

 2

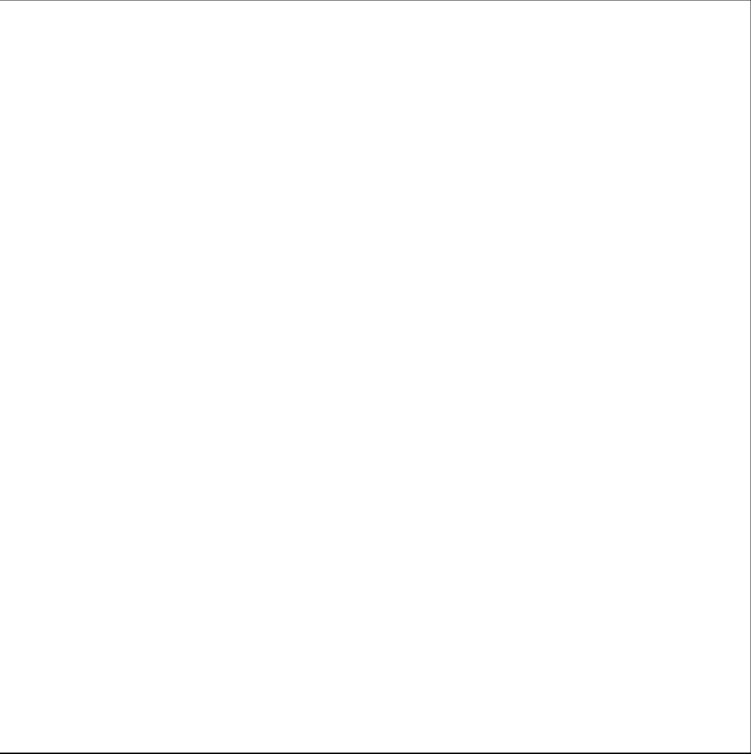
 日本語 ja



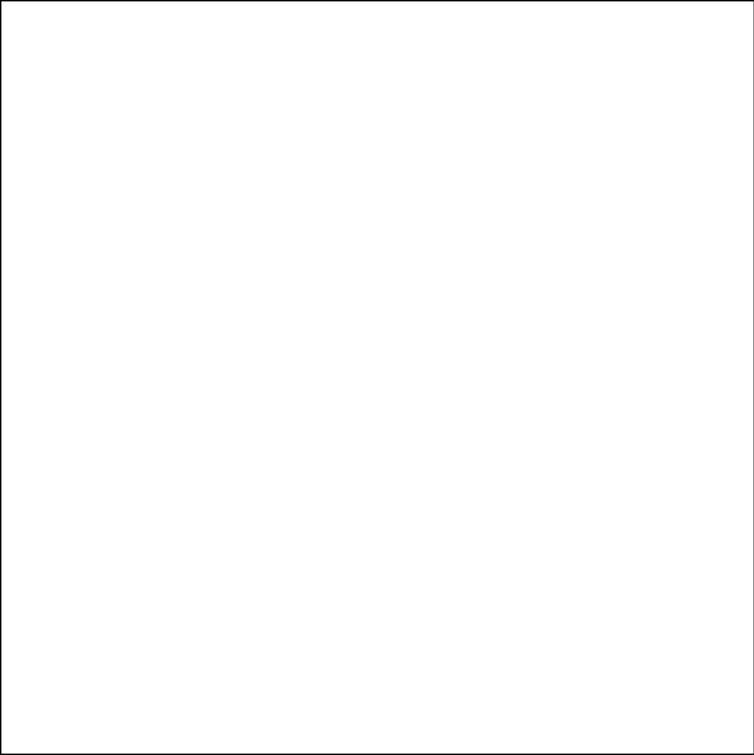
ある日、うさぎが川のほとりを歩いていました。



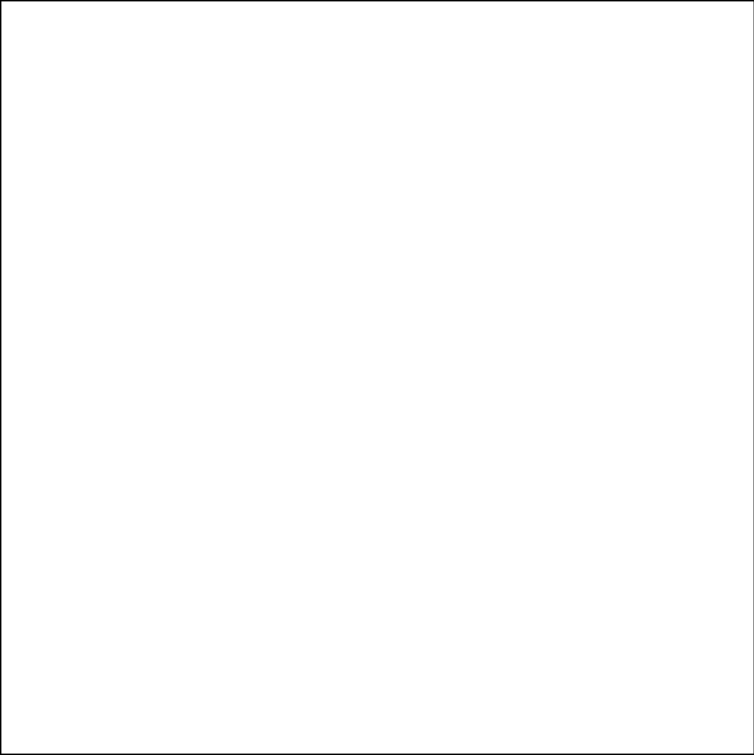
カバもそこで散歩をしながら、すてきな緑の草を食べていました。



カバは、うさぎがそこにいるとは知らず、あやまってうさぎの足を踏んでしまいました。うさぎはカバを見つめてそして叫びました。「おいカバ、わたしの足を踏んでいるのが分からないのか？」

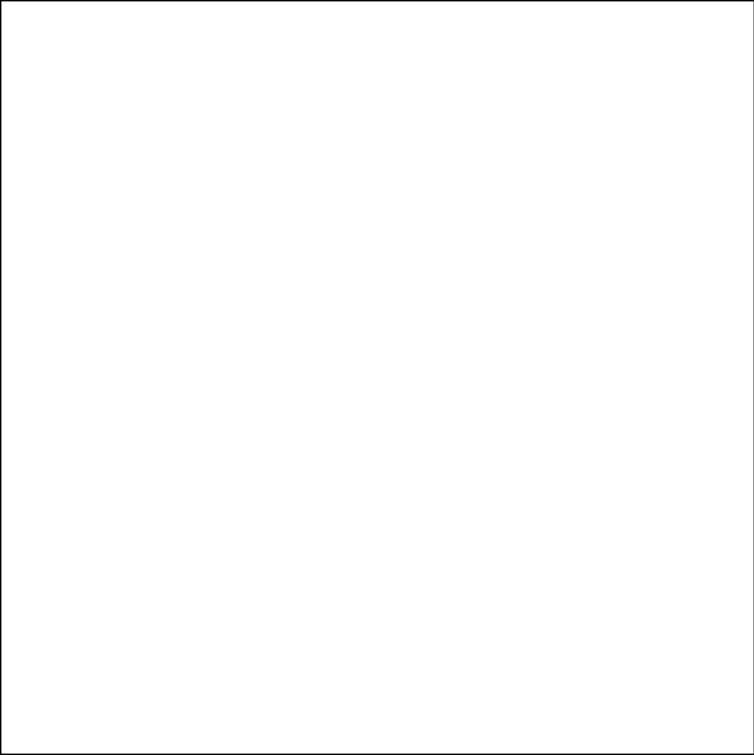


カバは、うさぎに謝りました。「ごめんよ。見えなかったんだ。どうか許してよ」けれどもうさぎは聞き入れず、カバに向かって叫びました。「わざとやっただろ！ 今に分かるさ。ただじゃすまないぞ！」

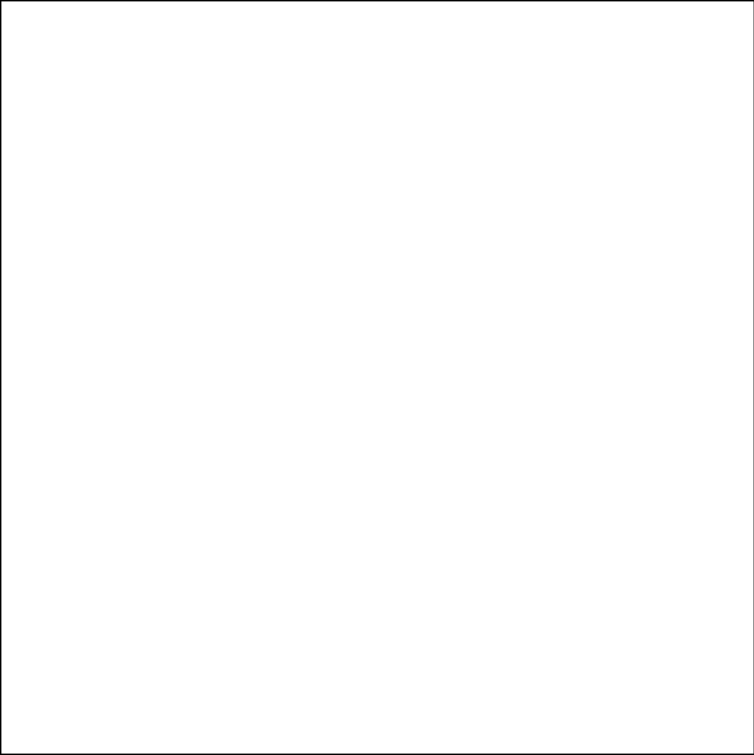


うさぎは火を探しに行き、こう言いました。

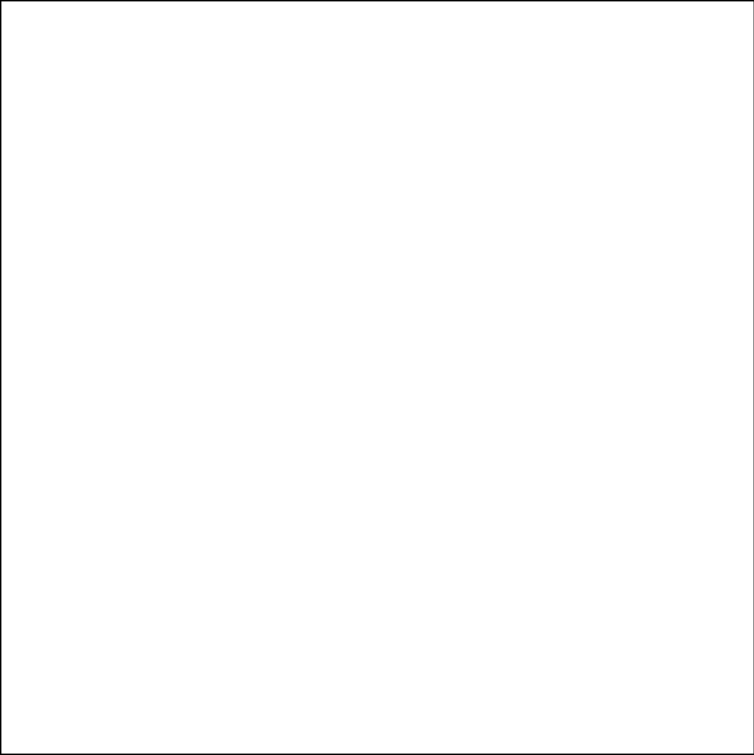
「行け！ 草を食べるために水から出てきた時、カバを燃やしてしまえ。やつは、わたしの足を踏んだんだ！」火は「お安い御用です。友達のうさぎさん。お望み通りにやりますよ」と答えました。



その後、カバが川から遠く離れた場所で、草を食べていると「ビュン！」火がつき炎が上がりました。炎はカバの毛を燃やし始めました。



カバは泣き出し、水を求めて走りました。カバの毛は全部火によって燃やされてなくなりました。カバは泣き続けました。「わたしの毛が火で燃えた！ わたしの毛はすっかりなくなっちゃった。わたしの美しい毛が！」






うさぎは、カバの毛が燃やされて、嬉しくなりました。そして、カバはこの日を機に火を恐れて、水から離れたところには二度と行かなくなりました。



Global Storybooks

globalstorybooks.net

カバに毛がない訳

-  Basilio Gimo, David Ker
-  Carol Liddiment
-  Sayuri Hayashi

